

4 定常的な問題解決の場を設ける

小さいながら教室も社会ですから、トラブルや問題は起こります。これは止めようがありません。なんとかしなければならぬことは、それが起こることよりも、それが放置されることではないでしょう。問題が起こったら、それについて解決の手が打たれるということが安心感につながり、問題の予防にもつながります。自動車に乗るにも修理工場がなかったら、病気になつても医者がいなくなつたらと思うと、安心して生活できないでしょう。同じように、問題解決の手続きや場があるということは、学級に安心感をつくる上でとても大切な要素ではないでしょうか。では、どういった解決の手続きが必要なのでしょう。

社会の多様化により子どもの生活も多様化してきました。トラブルや問題にも、教師の想定を超えられるようなことが起こります。だからといって、教師が解決を投げ出すわけにはいきません。

しかし、もつと子どもの力に頼るといふことを考えてもいいのではないかと思えます。「こういうときはこうすべきだ」「こうしよう」と、指示的、トップダウン式に解決するよりも、「こういうときはどうしたらいいだろうか」と子どもに投げかけ、子どもに解決策を考えさせるということをもつ

とやっていいのではないでしょうか。

「靴隠し」が頻発する学級（小六）を担当したことがあります。一学期のある日、ある子どもの靴がなくなりました。私が担任になってからは初めてですが、五年生のときから数えると七、八回目だと言います。

私はさつそく、学級全員で靴を探させました。靴はすぐに見つかりました。そしてその後で、やはり全員で「再発防止策」を考えました。

すると、その日を境にピタリと「靴隠し」はなくなったのです。

いままではどうやって解決していたのかを、子どもたちに聞きました。すると、当事者たちが呼ばれて、隠した子どもが謝ることもあれば、うやむやになることもあったとのこと。靴を隠された子どもは、ずっと不安だったと言いました。それはそうでしょう。一回されてもかなり不安になります。自分のこととしてとらえたらかなりのストレスです。それが七、八回繰り返され、ときには、靴の中にボンドや画鋏が入っていたというのです。隠された子どもは、怖さと不安からやがて「あきらめ」を抱くようになったそうです。「このクラスはダメだ」と。

たった一二年しか生きていないのに、人に対して「あきらめ」る。なんて悲しい学びなのかと思います。問題を個別化して、当事者間の問題にしてしまつては、集団は何も学びません。同じようなことを繰り返すだけです。しかし、問題が共有されることによって、こうした問題はかなり抑止力が働くだらうと考えられます。

問題が起こったときにみんなで話し合っている学級は少なくありません。しかし、それを定常的な



システムとして設定している学級は、それほど多くないように見受けられます。安心感とは安定感のなかから生まれるものです。問題が起こっても、取り上げられることと取り上げられないことがあるのでは、安心感も目減りしてしまいます。「いつもある」ということが安心感を強くします。

ここでは、定常的な問題解決の場として、クラス会議の実践を紹介します。

クラス会議の流れ

クラス会議とは、簡単に言えば生活上の諸問題を子どもが自分たちで解決する活動です。議題として、子どもが「困ったこと」や「みんなで決めたいこと」を提案して、話し合い、解決します。クラス会議の流れは次のようなものです。

- | | | |
|--------------|--------------------|---------|
| ①「ありがとう」探し | ② 前回の議題（解決策）の振り返り | ③ 議題の提案 |
| ④ 解決のための話し合い | ⑤ 解決策の決定と決まったことの発表 | |

(1) 準備

- ① 定期的に実施するために、時間を確保する

週に一回程度実施します。学級活動の時間が適切でしょう。一単位時間です。担任の都合でなく

したり延長したりしないようにします。国語や算数(数学)のように、いつも同じように実施することが大切です。

② 話し合いのときの隊形を決める

椅子だけで輪になります。机があるとうまく輪にならない場合は、机は廊下に出します。特別な隊形をつくることで、子どもの動機づけも高まります。

③ トーキングステイック

トーキングステイックについては、すでにご紹介しました。最初はあつたほうが話しやすい子どももいます。慣れてきたら、なくしてもいいのです。

④ 議題箱と議題の提案

議題箱は、スニーカーなどの入っていた丈夫な箱に包装紙などを貼り付け、ポストのように投函する穴と回収する穴を開けてつくりまます。子どもたちからボランティアを募って、折り紙などでデコレーションするときれい입니다。無地の紙を適当な大きさに切った議題提案用紙を用意し、議題箱とセットで置いておきます。「『困ったこと』や『みんなで話し合いたいこと』があつたら、この用紙に書いて投函してください」と話します。「誰かに何かされた」のような困りごとの場合は、相手の名前を書かないように言います。

⑤ 役割を決める

司会、副司会、黒板書記(二名)、ノート書記(一名)を子どもが分担します。最初は、ノート書記だけを決め、その他は教師が進行します。司会などをしたくと子どもが言い出したら、徐々に